

伊東市史だより

第8号

平成19年3月31日



写真1 和田一丁目の海岸にそびえていた十本松
(明治末年 梶本輝男氏蔵)



写真2 大正12年9月1日の地震と津波で全滅状態となった
和田一丁目周辺 (『関東震災畫報』から)

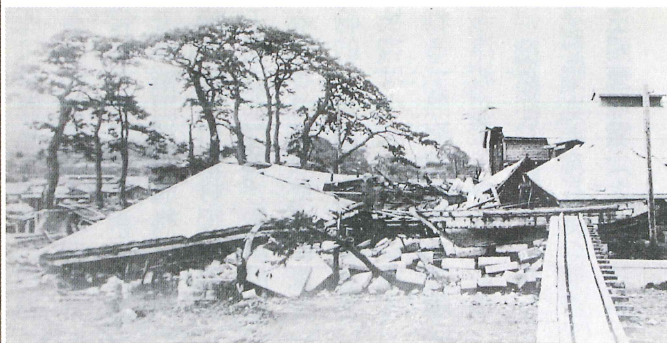


写真3 関東大震災で倒潰した豆東製氷の建物と背後の十本松
(この松によじ登って助かった人もある)

特集 伊東の地震と津波

伊東市史専門委員

今村文彦 (東北大学教授)

はじめに

伊豆東海岸は、房総半島と伊豆半島の二つの半島に挟まれた相模湾の北西部に位置しています。ここでは、フィリピン海プレートがユーラシア大陸プレートの下に沈み込んでおり、過去、繰り返し地震が発生させ、津波も伴っていたことが報告されています。

地球の構造上、地震や津波だけでなく、火山噴火も発生しやすい地域で、将来においても、同じ現象は繰り返し生じるものと考えられます。我々は、このような自然災害と共存しなければならぬのです。

そこで、大切な事項として：
● 過去を知り、将来を考えること

● 自助・共助の意識を持ち、出来ることから備えを実施すること

● 市民だけでなく観光客や来訪者に適切な情報を迅速に提供すること

この三点は特に重要です。市史編さん事業で伊東の歴史を明らかにすることは、過去を正確に知って、地震や津波の危険を予測し、対策を立てるのに役立ちます。

これまでにわかつている伊東周辺の地震・津波の過去の事例を挙げると以下の通りです。古い時代のものは史料に明確な被害の記述が見られないものもありますが、繰り返し大きな地震と津波が伊東を襲っていることが分かります。

- ① 元慶の関東地震（元慶二年〔西暦八七〇〕九月二十九日）
相模国分寺、同尼寺で被害があった（『日本三代実録』）。
- ② 嘉保の東海地震（嘉保三年〔一〇九六〕十一月二十四日）
駿河で杜寺・民家の流失四百余、伊豆の被害不明。
- ③ 明応の東海地震（明応七年〔一四九八〕八月二十五日）
鎌倉で津波による溺死者約二百人である。
- ④ 寛永小田原地震（寛永十年

〔一六三三〕一月二十一日）伊東での被害状況は不明確だが、小田原に大被害があり、熱海・網代・宇佐美に津波が記録されている。

⑤ 元禄地震（元禄十六年〔一七〇三〕十一月二十三日）
近世において伊東が経験した最大の津波被害として位置づけられる。伊東での被害状況（民家・寺院・船など）について「浜野家図」から窺える。

⑥ 宝永地震（宝永四年〔一七〇七〕十月四日）下田では家屋・船に大きな被害があり、死者は十一人であった。下田の被災民に代官（小長谷勘左衛門）による米の施しや金銭の貸し付けがあった。伊東では大きな被害はなかった模様。これは、四年前の元禄地震の大規模な被害を受けて、地震・津波に対する何らかの対策や住民の高い意識があった可能性がある。

⑦ 嘉永小田原地震（嘉永六年〔一八五三〕二月二日）小田原での被害が大きく、その被害情報が伊東にも伝わっていたが、被害は小さかったと思われる。ただし、石垣・土手の崩壊など被害があった。

⑧ 安政（嘉永）東海地震（嘉永七年〔一八五四〕十一月四日）伊豆半島では西海岸と下田が大きな被害を蒙った。網代村では、地震による屋根瓦の落下や急激な潮の干満があったが、人々には高所に避難しており、幸いにも人的被害はなかった。被害状況としては、宇佐美村では留田港が崩れて漁船が流出し、川奈村では急激な干潮によって、船が浜に取り残されていた。伊東では物的被害はあったが、人的被害は少なかったと考えられる。熱海では十mを超える津波が報告されているが、信頼性に疑問が残る（静岡県、一九八六）。

⑨ 大正関東地震（大正十二年

〔一九二三〕九月一日）関東地方南部を襲った大地震で未曾有の大災害が生じた。東京・横浜をはじめ都市部では地震後に発生した火災の著しい被害は知られているが、さらに、この地震はプレート境界の巨大地震であり、地震直後房総半島南部から三浦半島、相模湾北岸にかけて地盤が隆起し、丹沢山地を中心に沈降した。その結果、地震発生後数分から数十分のうちに大津波が相模湾岸と伊豆諸島、房総半島先端に押し寄せた。渡辺（一九九八）によると、津波の高さは熱海十二m、房総半島先端付近九m、伊豆大島岡田十二mと異常に大きな値も記録されている。

このように、伊東市周辺に多くの地震・津波が発生していますが、年代が遡るにつれて情報は少なくなり実態を把握するのが難しくなるのです。

津波挙動の特徴

元禄地震、大正関東地震による津波は、伊東に最も大きな被害をもたらした事例と考えられます。いずれも、南関東沖で発生した巨大プレート間地震で起きたもので、相模

岸に位置する伊東市は、波源からの津波を直接受ける場所なのです。

さらに、津波が沿岸で波高を増幅させる原因としては、水深が浅くなることによる浅水変形、V字湾など湾幅が狭くなることによる集中効果、津波の周期と地形（湾など）

ることになります。

また、津波の第一波の押し引きも簡単ではありません。沿岸部の伝承として、「津波は引き波で始まる」と言われますが、これは正しくはありません。地震による地盤変動の隆起や沈降の分布に対応して、津波の初動も変化します。宇佐美の行蓮寺の石碑には、元禄津波は始め押し波がありました。寛永津波では浜が干上がったことが記されています。また、熱海市史には地震で港が地盤隆起した記事もあります。これらは断層運動による海底地盤変動がそれぞれ異なっていることを示唆しています。

また、津波は地震ばかりが原因ではなく、火山活動や地滑りに伴う津波もあります。伊豆諸島などでの火山活動による津波の明らかな例は確認されていませんが、火砕流などが海域に到達すると津波を発生する可能性があります。

元禄地震による津波

一七〇三年に元禄関東地震が相模トラフで発生し、南関東地域で大きな被害が発生しました。その約一五〇年後の一八五五年には「安政江戸地震（東京直下型の地震）」が荒川河口付近を震源として発生

し、一万人前後の死者が発生しています。津波について最も重要な情報として、伊豆宇佐美の行蓮寺境内にある元禄津波碑があります。地震から五十九年後の宝暦十二年に建てられました。行蓮寺の碑文には「溺死者大凡三百八十余運命尽期」と刻まれ、津波の



写真6 佛現寺境内の元禄津波供養塔

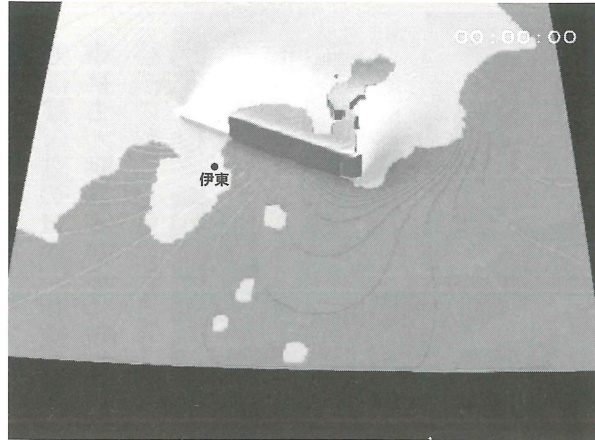


写真4 大正関東地震津波の数値シミュレーション（発生直後）

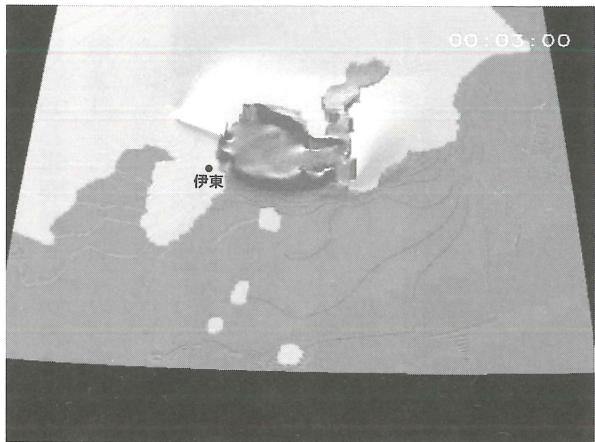


写真5 大正関東地震津波の数値シミュレーション（発生後3分）

湾沿岸および周辺に大きな津波を発生させました。津波の影響は、その発生時の規模だけでなく、発生位置が強く関係します。相模湾を挟んで対

が持つ固有振動周期が一致することによる共振現象、などがあります。いずれも複雑な地形の地域では、各地での津波の高さに大きな差が生まれ

犠牲者を供養しています。宇佐美には寺院の過去帳に記された津波記録や言い伝えが各所に残り、浸水域が海岸から1km近くまで至り、村落の大部分に浸水したことが追跡できます。このほか、伊東・川奈にも、供養碑が多く現存し



写真7a 宇佐美行蓮寺の元禄津波供養塔



写真7b 同供養塔銘文

ており、元禄津波がこの地域に猛威をふるったことを偲ばせています。寺院の石段にはい上がった潮位記録や浸水域の広がりから、宇佐美―川奈

間では津波の高さは八〜十mに達したと推定できます。さらに、いくつかのお寺には、地震・津波発生日の記載がある墓石が数多く残されており、過去帳と共に、人的被害の規模を知る重要な手がかりとなります。

大正関東地震による津波

一九二三年（大正十二）九月一日、関東地方南部を襲った大地震により、死者・行方不明十四万二千八百名、全壊建物十二万八千棟、全焼建物四十四万七千棟という未曾有の大災害がもたらされました。この地震はフィリピン海プレート沈み込みによって北西方向に押しつけられていた関東地方南部の岩盤が急激に跳ね返ることにより起きた。

プレート境界の巨大地震です。地震直後房総半島南部から三浦半島、相模湾北岸にかけては地盤が隆起し、丹沢山地を中心に沈降されました。震源に近い相模湾沿岸と南房総地域にとつては正に直下型大地震に襲われたのに等しく、地震の揺れによる被害（震害）が甚大でした。山崩れ・崖崩れも数多く発生し、また地震発生後数分から数十分のうちに大津波が相模湾岸と伊豆諸島に押し寄せたのです。

この津波により、宇佐美での津波は震後約七分で来襲し、全部で六回あり、このうち二回目のものが大きかったようです。宇佐美の被害は全壊三十三戸、半壊六十七戸、流出百一十一戸に上り、西留田の集落で被害はもつとも大きく、六〇戸のうち、五十一戸が被害をうけています。また、伊東は北東に開いた口の大きな湾をなしています。湾奥には伊東大川の形成した低地があるため、ここ全体に伊東の市街

地が展開しています。大正の関東地震においては、震後五分ほどで津波は来襲し、全壊二百十九戸、半壊三百九十二戸、流出二百九十四戸の被害を受け、七十九名の死者、三十名の行方不明者を出しており、伊豆半島東岸ではもつと被害が大きいのでした。



写真8 津波によって大川橋の欄干に船が乗り上げている（『関東震災畫報』から）。

が肝要です。歴史を伝える遺品から、津波のことをいつも

想起起こして、対策を講じてゆきましょう。



写真9 大川橋の欄干が保管されている稲葉さん（角屋酒店）のお宅

ているので、お読みになった市民も多いことと思います。さらに、現在も当時の様子を残す痕跡が起こされています。ひとつは、玖須美区長さんのお宅で大切に保管されている大川橋の欄干です。これは松川を津波が遡上した時に破壊されたものであり、津波の高さと破壊力を物語るものです。もうひとつは、海岸沿いにあった十本松の一部です。この松は、現在、写真10のよう



写真10b 十本松の説明文 写真10a 現在の十本松

にビルに取り囲まれて往時を想像するのが難しくなっていますが、表紙の写真1のおおりの十本の立派な松として伊東の和田浜にあったもので、関東大震災の時にはこの松のように登って命が助かったという人もあり、津波の脅威を体験して生き残った松なのです。こうした事例のように先人の体験を後世に伝え、正確に歴史を調べることによって災害の被害を最小限にすること



第1図 大正関東地震の津波による被災範囲（網かけ部分が浸水域）

伊東市史

古代史料編の編集を終えて

編集委員 山本幸司
(静岡文化芸術大学教授)

古代史料編纂の難しさ

このたび、伊東市史の古代・中世史料編の編集を終了することができましたが、今回の作業を振り返って、担当した古代部分の特徴などについて、簡単にお知らせしておこうと思います。

古代史料編を編集して改めて痛感したことは、まず第一に、伊東という特定の地域だけで史料集を編集するとなると、もともと史料の少ない古代史分野は大変だなあとということでした。もちろん、そのことは当初から予想されていたことですし、当然といえば当然のことですが、その中で前回の市史と違う特色を出そうとなると、一つは、いわゆる

正統的な歴史学の史料から外れるものまで含めて編集するということが、もう一つは文献以外の考古学に近い史料を収録するということがなかなかあります。

その観点から、今回、史料編に収録したのが、一つは軍記文学関係の史料です。伊東が、かつて伊豆に流され、そこから蜂起して鎌倉幕府を樹立した源頼朝と縁の深い土地であることは、今さらいうまでもないことです。しかし、この鎌倉初期の政治史を検討するに当たっては、文書史料や日記類以外に、軍記文学に頼って構成しなければならぬ点も少なくありません。その意味では鎌倉初期は、文書その他の史料が豊富な時代と違って、軍記文学の史料価値が高く評価される時代だということもできるでしょう。

また、考古学に近い分野としては、発掘された史料に記されている文字史料が挙げられますが、特に近年、古代史

で広く利用されている木簡史料があるので、これを掲載することにしました。木簡とは、木札に墨で文字を記したものをいいます。木簡は、平城宮跡を初めとする各地の遺跡から出土していますが、その記載内容によって、古代国家の官人や官司の間の連絡や記録に用いられたものと、地方から調などの税として納められた品物に付けられた送り状・荷札などがあります。今回の古代史料編に収められたものは、いずれもその後者に当たります。こうした木簡類には送った人の名前や、その人の住んでいた地名などが残されているため、古代の地名や地方官人の氏名、各地の産物などを知る上での貴重な史料として評価されています。

軍記文学類と木簡の収録

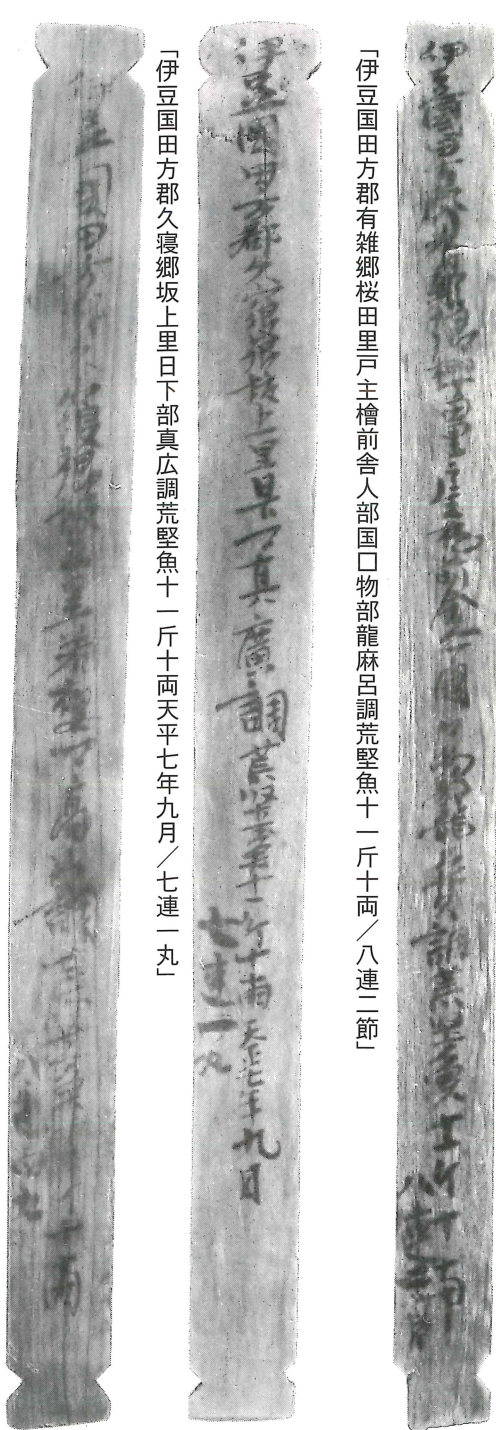
以上のような観点から、具体的には、まず神奈川大学の近藤好和さんをお願いして、『平家物語』とその異本類の

中で、頼朝と伊豆に関係する史料について広く集め、それに解説を加えてもらうこととし、それに承久の乱に関する軍記である『承久記』を含めました。また軍記文学の中でも、特に伊東氏と関係のある『曾我物語』については、これも『曾我物語』研究の第一人者である創価大学の坂井孝一さんに依頼して、伊東と関係する記述が多い部分について、専門的見地から構成した仮名本と真字本の両方のテキストを収録することとしました。改めて御紹介するまでもないでしょうが、『曾我物語』は嵯美入道が継娘との間に密かに儲けた子供祐継（助継）を嫡子に立て、伊東の荘を譲ったことに端を発する、伊東一族の血で血を洗う抗争の物語であり、しかも時代的には、あたかも源平争乱の時代にあたることから、日本の歴史の中で、伊豆半島のこの地域が大きくクロージアアップされた時代に取材した物語です。

「伊豆国田方郡久寝郷坂上里若松部高山調荒堅魚十一斤十兩／八連四丸」

「伊豆国田方郡久寝郷坂上里日下部真広調荒堅魚十一斤十兩天平七年九月／七連一九」

「伊豆国田方郡有難郷桜田里戸主檜前舎人部国口物部龍麻呂調荒堅魚十一斤十兩／八連二節」



その他の史料

次に木簡ですが、今回は古代の伊東市域に当たると考えられる、伊豆国有難郷と久寝郷から送られたものと判断される木簡を収録しました。また木簡の収録に対しては、特に地元の要望も強いということなので、所蔵先との関係ですべてというわけにはいきませんが、手に入る限り、写真版と一緒に掲載することとしました。

古代の地方史を知る上で、一般的に重要な史料となるのは、古典として記紀と並び称される『風土記』であることは、多くの方が御存知でしょう。『風土記』は、七三三年（和銅六）に律令国家の命によって各国で筆録された地方誌で、この時に撰進された『風土記』を、その後の時代

に各地で編纂された風土記類と区別して特に古風土記と称しますが、伊豆国に関しては残念ながら古風土記は残存していません。ただわずかに江戸中期の国学者である今井似閑という人が、南北朝時代における南朝方の中心人物であった北畠親房の著書とされている『鎌倉実記』に残っている記事を、古風土記の逸文だとして採り上げたものだけが伝えられています。『鎌倉実

写真 平城宮跡出土木簡 (写真提供 奈良国立文化財研究所)

記』は、恐らくは北畠親房に仮託された偽書ではないかと推測されており、この記事が古風土記の残存だと判断するのは、かなり困難だとは考えますが、快速の船とか狩場の話とか伊東市域に関する記述には、いちがいに荒唐無稽としてしりぞけることのできない信憑性も感じられるので、史料としての信憑性に疑問があることを断った上で、敢えて収録しました。

また地味な史料ですが、『和名類聚抄』は承平年間（九三一〜九三八）に源順が著した漢和辞書で、特にその中の国郡部は、『延喜式』以前の、九世紀における国郡郷編成を示す史料として貴重なものです。ここでは同書の記述に池辺彌氏が考証を加えた『和名類聚抄郷名考證』から、伊東だけでなく伊豆国全体に関する箇所を収載しました。

最後に古代史にとって重要な意味を持つ神祇史に関する史料として、『延喜式』の神名帳を掲載しました。『延喜式』というのは古代の法律である式を集成した法典で、先行する弘仁式と貞観式を集成し、さらにその後の法令等を加えて、九二七年に撰進されたものですが、その『延喜式』全五十巻の首部十巻には、神祇官に関する式が集められていて、特に巻九・十には各国の神名が列挙されています。ここに収載したのは、その中で伊豆国に関する箇所です。

待望の伊東市史本編！

「伊東市史 史料編 古代・中世」

古代・中世

B5版 850頁、

頒価5000円

『伊東市史 史料編 古代・中世』が完成しました。昭和33年に市政施行十周年を記念した『伊東市史』以来、およそ五十年ぶりに伊東の歴史を

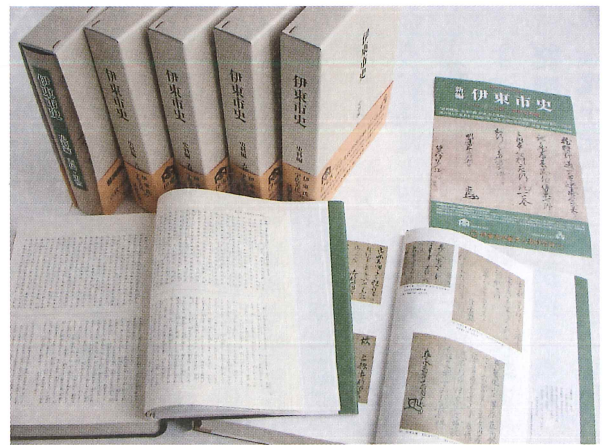


写真 完成した『伊東市史 史料編 古代・中世』

語る原典が刊行されたことになり。

この巻は、奈良・平安時代から戦国時代の終わりまでの伊東に関するさまざまな史料を集成しています。

奈良の平城宮遺跡で出土した木簡には宇佐美や伊東の古代地名や人名が記されています。この木簡史料の実物写真を収録して、正確な読みがでるよう構成しました。

また、伊東氏と宇佐美氏を中心とした武士団の活躍を示

す史料を集成しました。その時代の領地争いから生まれた『曾我物語』を原典に立ち返って読み返せるようにし、漢文表記と仮名混じり文の両方を収載して、伊東祐親の行動や曾我兄弟のあだ討ちも正確に読み取れるように配列し、解説を加えました。

さらに、伊東家の数百年に及ぶ長い繁栄を詳細に追跡できるように系図、古文書、鎌倉幕府の記録である『吾妻鑑』も年代を追ってたどれるように配置してあります。

伊東の中世史で忘れてはならないのが日蓮に関する史料です。日蓮宗の宗祖である日蓮聖人は鎌倉から流罪に処せられて伊東で三年を過ごします。この間に『教機時国鈔』

『四恩鈔』などの書物を著しますが、今回の史料集には、こうした日蓮の伊東での著述についても収録しました。

また、市内の神社の所蔵史料も調査され、新たな発見による中世史料も掲載できてい

ます。

伊東家も宇佐美家も全国的に活躍した血筋を誇る家です。伊東家から出た一族は各地で領主や大名として成長する事例がたくさんあります。そうした全国各地の伊東家、宇佐美家に関する史料もできるだけ集成しています。

本書は、今後予定の伊東の歴史を大観するためには是非とも必要な原典ともいえますし、全国の伊東さんや宇佐美さんが注目する内容とも言えます。市立図書館や各コミュニティセンターには配置しますが、各家庭でも活用くださるようお願いします。

希望者は、市内の図書納入組合加盟書店で直接ご購入いただけます。あるいは、郵送希望の場合は左記担当までお電話で申し込みください。

編集発行 伊東市教育委員会

生涯学習課 市史編さん係

〒414-8555 伊東市大原二丁目一番一号

☎〇五五七―三六―〇二一 内線二八四五